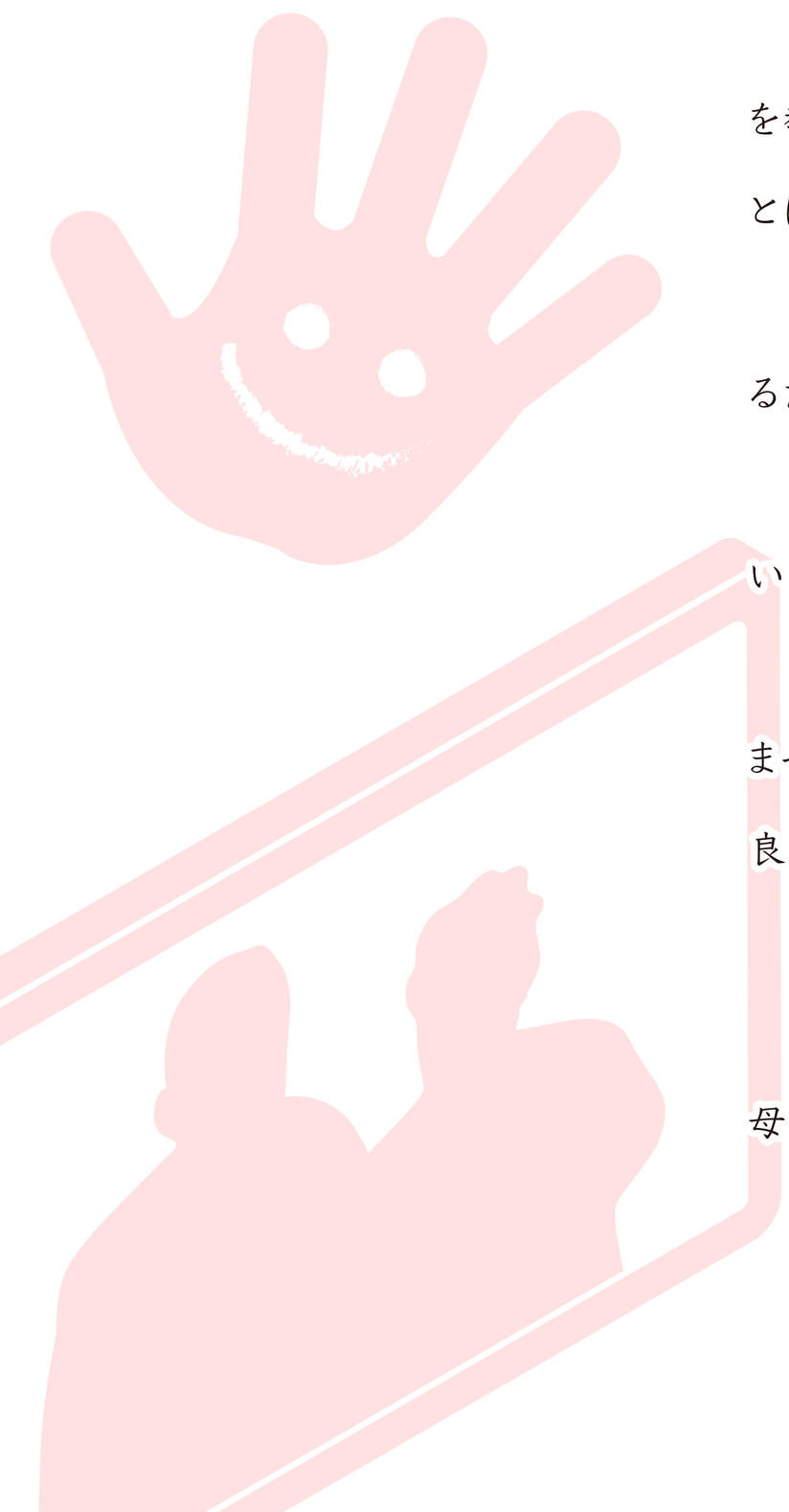
笑顔マーク

中村 真李絵［大阪府］



いびつな丸にニッコリ笑顔のマーク。

まだ小学校にもあがらない息子が自分で手のひらに描いた笑顔マークだ。私は、不思議な事をするものだなぁ、とのんびり眺めていた。

毎日描かれる笑顔マークに違和感を覚えなくなった頃、夫が息子の笑顔マークを消そうとして、息子にこう言われた、と教えてくれた。

「僕、おともだちがいないから、自分でかいているの。」

私はハッとした。息子は3週間前に夫の転勤で幼稚園を変わったばかりだったのだ。お友達ができるかな、迷惑をかけてないかな、不安な顔で毎日自分の事を覗き込む母には心配をかけまい、と言えずにいたのだ。そんな幼心を想うと胸が締め付けられて苦しかった。

翌日、私はある作戦に出た。長らく帰省できていなかった実家の父母にビデオ通話を教え、息子と顔を合わせて話をしてもらうことにした。友達を代わりに作ってあげることはできないが、息子を愛する人が一人でも多くいることを肌で感じてほしかった。

見慣れた愛媛の景色の中、ビデオ通話に不慣れな父母が映った。息子の顔が映るだけで大喜びだ。その様子を見て、息子も久しぶりに心からの笑顔を見せていた。

たった10分。他愛もない天気の話をしたぐらいだった。それでも小さな画面から届いた笑顔の届け物は、孤独に戦っていた息子の心を満たすには十分だった。

その様子を見ていると、私は心配のあまりいつも八の字眉毛で口を出しすぎてしまっていたのかな、と反省した。ただ、笑顔で「おかえり」を言って温かく迎えるだけで良かったのかもしれない。

翌日から、息子の手には笑顔マークの姿は無かった。きっと、その役目を終えたのだ。

息子が心細い時、側にいてくれてありがとう。今日からは君の代わりに私が愛顔の母でいようと思います。